新春初詣会（護国寺・雑司ヶ谷界隈）

平成２６年１月１８日（土）

ま　ほ　ろ　ば　会

はじめに

まほろば会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。まほろば会の平成２６年の行事幕開けは、恒例の「新春初詣会」です。今年は、徳川幕府五代将軍綱吉の生母である「桂昌院」の祈願寺「護国寺」をスタート地点としました。桂昌院は、三代将軍家光の側室（お玉の方）で、綱吉が命じた「生類憐みの令」との係わりでも有名な人物です。護国寺の本堂（１６９７年建立）および「月光殿」（桃山時代）は、ともに国の重要文化財で、そのほか「仁王門」・「惣門」なども見ごたえがある建造物です。

せっかくの初詣会なので、今年も昨年（日本橋七福神めぐり）に引き続き「雑司ヶ谷七福神」を回ります。途中で「旧マッケーレブ邸（雑司ヶ谷旧宣教師館）」に寄り、１９世紀後半のアメリカ郊外住宅の雰囲気を味わっていただきます。もちろん、雑司ヶ谷ですのでかの有名な「雑司ヶ谷鬼子母神（大黒天）」も見学します。

そして、今年の新春初詣会の「とり」は、「池袋サンシャインシティ・５９階スカイレストラン」での展望昼食と、「オリエント博物館」見学です。どうぞお楽しみください。

幹事一同

「平成２６年まほろば会新春初詣会」講師用資料

護　国　寺（徳川綱吉・桂昌院）

＜徳川綱吉＞

3代将軍・徳川家光の四男として江戸城に生まれる。幼名は徳松（とくまつ）。

慶安4年（1651年）4月、三兄の長松（のちの徳川綱重）とともに賄領として近江、美濃、信濃、駿河、上野から15万石を拝領し家臣団を付けられる。同月には家光が死去し、8月に長兄の徳川家綱が将軍宣下を受ける。承応2年（1653年）8月に家綱の右大臣昇進にあわせて二人の弟は元服し、偏諱（「綱」の字）を受けて長松は綱重、徳松は「綱吉」とそれぞれ名乗った（「松平右馬頭綱吉」と松平姓を称したとされる）。同時に従三位・左近衛中将・右馬頭に叙任。

明暦3年（1657年）、明暦の大火で竹橋の自邸が焼失したために9月に神田へ移る。寛文元年（1661年）8月、上野館林藩主として城持ちとなったことで所領は25万石となる。12月には参議に叙任され、この頃「館林宰相」と通称され、徳川氏を名乗ったと考えられる（館林徳川家の創設）。幕府から家臣が付属されており、誕生後から館林藩主となるまで380人近くが派遣された。寛文10年（1670年）に牧野成貞を館林藩家老 3,000 石に抜擢する。館林藩主となったが、綱吉は基本的に江戸在住であって家臣の八割も神田の御殿に詰めており、生涯で館林に寄ったことは寛文 3 年の将軍家綱に随伴した日光詣での帰路のみであった。

延宝8年（1680年）5月、家綱に跡継ぎとなれる男子がなく、その養子になれたであろう三兄の綱重も既に亡くなっていたため、家綱の養嗣子として江戸城二の丸に迎えられ、同月に家綱が40歳で死去したために内大臣および右近衛大将となりさらに将軍宣下を受ける。

家綱時代の大老・酒井忠清を廃し、自己の将軍職就任に功労があった堀田正俊を大老とした。その後、忠清は病死するが、酒井家を改易にしたい綱吉は大目付に「墓から掘り起こせ」などと命じて病死かどうかを異常なまでに詮議させたという。しかし証拠は出せず、結局は忠清の弟忠能が言いがかりをつけられて改易されるにとどまった。

綱吉は堀田正俊を片腕に処分が確定していた越後高田藩の継承問題（越後騒動）を裁定し直したり、諸藩の政治を監査するなどして積極的な政治に乗り出し、「左様せい様」と陰口された家綱時代に没落した将軍権威の向上に努めた。また幕府の会計監査のために勘定吟味役を設置して、有能な小身旗本の登用をねらった。荻原重秀もここから登用されている。また外様大名からも一部幕閣への登用がみられる。

また、戦国の殺伐とした気風を排除して徳を重んずる文治政治を推進した。これは父・家光が綱吉に儒学を叩き込んだことに影響している（弟としての分をわきまえさせ、家綱に無礼を働かないようにするためだったという）。綱吉は林信篤をしばしば召しては経書の討論を行い、また四書や易経を幕臣に講義したほか、学問の中心地として湯島聖堂を建立するなど大変学問好きな将軍であった。儒学の影響で歴代将軍の中でも最も尊皇心が厚かった将軍としても知られ、御料（皇室領）を1万石から3万石に増額して献上し、また大和国と河内国一帯の御陵を調査の上、修復が必要なものに巨額な資金をかけて計66陵を修復させた。公家達の所領についてもおおむね綱吉時代に倍増している。

また、のちに赤穂藩主・浅野長矩を大名としては異例の即日切腹に処したのも、朝廷との儀式を台無しにされたことへの綱吉の激怒が大きな原因であったようである。綱吉のこうした儒学を重んじる姿勢は、新井白石・室鳩巣・荻生徂徠・雨森芳洲・山鹿素行らの学者を輩出するきっかけにもなり、この時代に儒学が隆盛を極めた。

綱吉の治世の前半は、基本的には善政として天和の治と称えられている。

しかし貞享元年（1684年）、堀田正俊が若年寄・稲葉正休に刺殺されると、綱吉は以後大老を置かず側用人の牧野成貞、柳沢吉保らを重用して老中などを遠ざけるようになった。また綱吉は儒学の孝に影響されて、母・桂昌院に従一位という前例のない高位を朝廷より賜るなど、特別な処遇をした。桂昌院とゆかりの深い本庄家・牧野家（小諸藩主）などに特別な計らいがあったともいう。

この頃から有名な生類憐れみの令をはじめとする、後世に“悪政”といわれる政治を次々と行うようになった（生類憐れみの令については、母の寵愛していた隆光僧正の言を採用して発布したものであるとする説があったが、現在では隆光や桂昌院と生類憐れみの令の関係は否定されている。また、一般的に信じられている「過酷な悪法」とする説は、江戸時代史見直しの中で再考されつつある。）。これらが幕府の財政を悪化させた。勘定吟味役（後の勘定奉行）・荻原重秀の献策による貨幣の改鋳を実施したが、本来改鋳すべき時期をやや逸していたこともあり、また元禄金と元禄銀の品位低下のアンバランス、富裕層による良質の旧貨の退蔵から、かえって経済を混乱させている。

嫡男の徳松が死去した後の将軍後継問題では、綱吉の娘婿（娘・鶴姫の夫）である徳川綱教（紀州徳川家）が候補に上がったが徳川光圀が反対したという説もある。宝永元年（1704年）、6代将軍は甥（兄・綱重の子）で甲府徳川家の綱豊（のちの家宣）に決定する。綱吉は宝永6年（1709年）に成人麻疹により死去、享年63。

＊＊綱吉の評価＊＊

綱吉の行状については価値の低い資料による報告が誇張されて伝えられている部分もあり、近年では綱吉の政治に対する評価の再検討が行われている。

綱吉は「側近の寵臣以外の意見を軽視し、悪法で民衆を苦しめた」という否定的評価がなされる一方で、元禄4年（1691年）と同5年（1692年）に江戸で綱吉に謁見したドイツ人医師エンゲルベルト・ケンペルの「非常に英邁な君主であるという印象を受けた」といった評価も受けている（ケンペル著『日本誌』）。ケンペルの綱吉観や両者の交流については中公新書刊行『ケンペルと徳川綱吉』（ベアトリス・M. ボダルト・ベイリー・1994年 ISBN 4-12-101168-6）に詳しい。

綱吉の治世下は、近松門左衛門、井原西鶴、松尾芭蕉といった文化人を生んだ元禄期であり、好景気の時代だったことから優れた経済政策を執っていたという評価もある。また、治世の前期と後期の評価を分けて考えるべきだという説もある。前期における幕政刷新の試みはある程度成功しており、享保の改革を行った8代将軍徳川吉宗も綱吉の定めた天和令をそのまま「武家諸法度」として採用するなど、その施政には綱吉前期の治世を範とした政策が多いと指摘されている。

綱吉の治世の評価が低いことについては、不幸な偶然もいくつかあると指摘されている。具体的には、元禄8年（1695年）頃から始まる奥州の飢饉、元禄11年（1698年）の勅額大火（数寄屋橋門外より出火し上野を経て千住まで300町余を焼失、死者3,000人以上）、元禄16年（1703年）の元禄地震・火事、宝永元年（1704年）前後の浅間山噴火・諸国の洪水、宝永4年（1707年）の宝永地震・富士山噴火、および宝永5年（1708年）の京都大火などである。

それらは、現代では治世の評価を左右するものとは考えにくいが、当時はこういった天変地異を「天罰（＝主君の徳が無いために起こった）」と捉える風潮が残っていた。
新井白石は、元禄 8 年（1695 年）以来始まった貨幣改鋳は、近年の奢侈流行による幕府の出費拡大の穴埋めのために金銀の如き天地から生まれた大宝に混ぜ物をした結果、天災地変を招いたのであって、これよりひどい悪政は前後にその類を見ないと酷評した。 これは白石の儒教的思想に基づくもので、家康の時代より続いた慶長の幣制は変えてはならず、金銀は「天地の骨」とする陰陽五行説から来る信仰であった。
また、現代においての評価の低さはドラマによるところが最も大きい。というのも綱吉がドラマに登場するのは基本的に『忠臣蔵』関連か『水戸黄門』関連のドラマのどちらかであることが多いためである（そのためか歴代徳川将軍の中でも知名度の高い部類に入る）。
『忠臣蔵』（元禄赤穂事件）では大抵の場合、高家・吉良義央が浅野長矩をいじめる姿が描かれる。その結果、長矩にのみ切腹を命じて義央の罪を問わなかった綱吉には「いじめっ子」に加担したかのような否定的イメージが付きまとってしまう。このことも、綱吉の評価を実際以上に低めていると言える。
そして綱吉のもう一つの不運は『水戸黄門』徳川光圀の存在である。光圀には生類憐れみの令に抗議して犬の毛皮を送ったという逸話を中心に綱吉に直言したという記録がいくつかあるため、水戸黄門の物語中では悪役を割り当てられてしまっている。また、光圀が『大日本史』を編纂し、綱吉が自ら易経を講じるなど、類似した方向性を持っていたことから、水戸黄門ファンの中には、黄門を持ち上げるためにことさらに綱吉をけなすという風潮もある。
綱吉再評価に関する文献として、代表的で入手が容易なものとして、吉川弘文館『徳川綱吉』（塚本学・1998 年）、文春新書『黄門さまと犬公方』（山室恭子・1998 年 ISBN 4-16-660010-9）が挙げられる。また、2004 年 12 月 28 日にフジテレビ系列で放送されたドラマ『徳川綱吉 イヌと呼ばれた男』も、この再評価に連なる系列のものである。井沢元彦も『逆説の日本史』中で「戦国の気風を残した世相を、生命を大事にする太平の世へと変革した」と非常に高く評価している。

＜明暦の大火（振袖火事）＞

明暦の大火（めいれきのたいか）とは明暦 3 年 1 月 18 日（1657 年 3 月 2 日）から 1 月 20 日（3 月 4 日）にかけて、当時の江戸の大半を焼失するに至った大火災。振袖火事・丸山火事とも呼ばれる。
この明暦の火災による被害は延焼面積・死者共に江戸時代最大で、江戸の三大火の筆頭としても挙げられる。外堀以内のほぼ全域、天守閣を含む江戸城や多数の大名屋敷、市街地の大半を焼失した。死者は諸説あるが 3 万から 10 万人と記録されている。江戸城天守はこれ以後、再建されなかった。
火災としては東京大空襲、関東大震災などの戦禍・震災を除けば、日本史上最大のものである。日本ではこれを、ロンドン大火、ローマ大火と並ぶ世界三大大火の一つに数えることもある。
明暦の大火を契機に江戸の都市改造が行われた。御三家の屋敷が江戸城外へ転出。それに伴い武家屋敷・大名屋敷、寺社が移転した。防備上千住大橋のみしかなかった隅田川への架橋（両国橋や永代橋など）が行われ、隅田川東岸に深川など、市街地が拡大した。吉祥寺や下連雀など郊外への移住も進んだ。市区改正が行われた。
防災への取り組みも行われた。火除地や延焼を遮断する防火線として広小路が設置された。現在でも上野広小路などの地名が残っている。幕府は耐火建築として土蔵造や瓦葺屋根を奨励したが、その後も板葺き板壁の町屋は多く残り、「火事と喧嘩は江戸の華」と言われるとおり、江戸はその後もしばしば大火

に見舞われた。
この火災の特記すべき点は火元が 1 箇所ではなく、本郷・小石川・麹町の 3 箇所から連続的に発生したもので、ひとつ目の火災が終息しようとしているところへ次の火災が発生し、結果的に江戸市街の 6 割、家康開府以来から続く古い密集した市街地においてはそのすべてが焼き尽くされた点にある。このことはのちに語られる 2 つの放火説の有力な根拠のひとつとなっている。
当時の様子を記録した『むさしあぶみ』によると、前年の 11 月から 80 日以上雨が降っておらず、非常に乾燥した状態が続いており当日は辰の刻（午前 8 時頃）から北西の風が強く吹き、人々の往来もまばらであったとある。
＊＊3 回の出火＊＊
1．1 月 18 日（3 月 2 日）未の刻（14 時頃）、本郷丸山の本妙寺より出火。神田、京橋方面に燃え広がり、隅田川対岸にまで及ぶ。霊巌寺で炎に追い詰められた 1 万人近くの避難民が死亡、浅草橋では脱獄の誤報を信じた役人が門を閉ざしたため、逃げ場を失った 2 万人以上が犠牲となる。
2．1 月 19 日（3 月 3 日）巳の刻（10 時頃）、小石川伝通院表門下、新鷹匠町の大番衆与力の宿所より出火。飯田橋から九段一体に延焼し、江戸城は天守閣を含む大半が焼失。
3．1 月 19 日（3 月 3 日）申の刻（16 時頃）、麹町 5 丁目の在家より出火。南東方面へ延焼し、新橋の海岸に至って鎮火。
＊＊火元についての諸説＊＊
（本妙寺失火説）
振袖火事とも呼ばれる所以は以下のような伝承があるためである。
ウメノは本妙寺の墓参りの帰り、上野のお山に姿を消した寺小姓の振袖に魂を招かれて恋をし、その振袖の紋や柄行と同じ振袖をこしらえてもらって夫婦遊びに明け暮れた。その紋は桔梗紋、柄行は荒磯の波模様に、菊。そして、恋の病に臥せったまま承応 4 年 1 月 18 日（1655 年 2 月 22 日）、17 歳で亡くなった。寺では葬儀が済むと、不受不施の仕来りによって異教徒の振袖は供養せず、質屋へ売り払った。その振袖はキノの手に渡ったが、キノも 17 歳で、翌明暦 2 年の同じ日（1656 年 2 月 11 日）に死亡した。振袖は再び質屋を経て、イクのもとに渡ったが、同じように明暦 3 年 1 月 18 日（1657 年 2 月 28 日）に 17 歳で亡くなった。
イクの葬儀に至って三家は相談し、異教徒の振り袖をしきたりに反して、本妙寺で供養してもらうことにした。しかし和尚が読経しながら振袖を火の中に投げ込んだ瞬間、突如吹いたつむじ風によって振袖が舞い上がって本堂に飛び込み、それが燃え広がって江戸中が大火となったという。
この伝説は、矢田挿雲が細かく取材して著し、小泉八雲も登場人物は異なるものの、記録を残している。
（幕府放火説）
幕府が江戸の都市改造を実行するために放火したとする説。
当時の江戸は急速な発展で都市機能が限界に達しており、もはや軍事優先の都市計画ではどうにもならないところまで来ていた。しかし、都市改造には住民の説得や立ち退きに対する補償などが大きな障壁となっていた。そこで幕府は大火を起こして江戸市街を焼け野原にしてしまえば都市改造が一気にやれるようになると考えたのだという。江戸の冬はたいてい北西の風が吹くため、放火計画は立てやすかったと思われる。実際に大火後の江戸では都市改造が行われている。一方で先述のように江戸城にまで大きな被害が及ぶなどしており、幕府放火説の真偽はともかく、幕府側も火災で被害を受ける結果になっ

ている。

（本妙寺火元引受説）

実際の火元は老中・阿部忠秋の屋敷であった。しかし、老中の屋敷が火元となると幕府の威信が失墜してしまうということで幕府の要請により阿部邸に隣接した本妙寺が火元ということにし、上記のような話を広めたのだとする説。これは、火元であるはずの本妙寺が大火後も取り潰しにあわなかったどころか、大火以前より大きな寺院となり、さらに大正時代にいたるまで阿部家より毎年多額の供養料が納められていたことなどを論拠としている。本妙寺も江戸幕府崩壊後はこの説を主張している。

＜桂昌院＞

桂昌院（けいしょういん、寛永4年（1627年） － 宝永2年6月22日（1705年8月11日））は、江戸時代の女性。江戸幕府3代将軍・徳川家光の側室で、5代将軍・綱吉の生母。通称はお玉の方。『徳川実紀』に拠れば、父は北小路太郎兵衛宗正。母は鍋田氏の娘。兄に北小路道芳（後に本庄姓を賜り本庄道芳）、弟に本庄宗資がいる。

京都の大徳寺付近で産まれる。『徳川実紀』に拠れば、父は関白・二条光平の家司である北小路太郎兵衛宗正だが、実際の出身はもっと低い身分であるという噂が生前からあった。桂昌院と同時代の人物の記録では、朝日重章の日記『鸚鵡籠中記』には、従一位の官位を賜ったときに西陣織屋の娘であるという落首があったことが記されており、また戸田茂睡の『御当代記』には、畳屋の娘という説が記されている。黒川道祐の『遠碧軒記』人倫部には二条家家司北小路宮内が「久しく使ふ高麗人の女」に産ませた娘とする。死後やや経ってからの『元正間記』には大根売りの妹、さらに後の時代の『玉輿記』には、父は八百屋の仁左衛門で養父が北小路太郎兵衛宗正という説が記されている。

寛永16年（1639年）に御小姓として家光の側室のお万の方に仕え、その際に春日局の部屋子として家光に見初められ、家光の側室となる。正保3年（1646年）1月に綱吉を産んだ。

慶安4年（1651年）に家光が死ぬと落飾して大奥を離れ、筑波山知足院に入る。4代将軍・家綱の死後、延宝8年（1680年）に綱吉が将軍職に就くと、江戸城三の丸へ入った。貞享元年（1684年）11月に従三位を、元禄15年（1702年）2月には女性最高位の従一位の官位と、藤原光子（または宗子）という名前を賜る。宝永2年（1705年）6月に79歳で没。

実家の本庄氏は桂昌院の威光により、その一族は高富藩、小諸藩、宮津藩、笠間藩、足利藩などの小藩ながら藩主として立身出世を果たしている。墓所は東京都港区の増上寺。遺髪塚が寺の復興に貢献した京都府京都市西京区の善峯寺に「桂昌院廟」として存在する。

＊＊逸話＊＊

- 男子の生まれない綱吉に対し、帰依していた亮賢に僧の隆光を紹介され生類憐れみの令発令に関わったという説があったが、その時期に隆光がまだ江戸にいなかったことから、現在では否定されている。
- 綱吉の正室の鷹司信子とは仲が悪かったともいうが、これも確証はない。
- 応仁の乱で一部が焼失した京都の善峯寺の再興に尽力している。
- しばしば「玉の輿」の語源とされるが、俗説に過ぎないようである。大徳寺・塔頭の総見院では、「玉の輿」の玉とは桂昌院のことと語り伝えていた。また、京都の今宮神社の名物（あぶり餅）は玉のような餅を食べ、玉（桂昌院）のようなご利益をあやかろうとしたという言い伝えがある。

・埋葬された増上寺で徳川将軍家の墓地が改葬された際に、遺骨の調査を担当した鈴木尚が中心となって編纂した『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』によれば、血液型はA型で、四肢骨から推定した身長は146.8センチメートルである。

＜園城寺（三井寺）＞

園城寺（おんじょうじ）は、滋賀県大津市にある、天台寺門宗の総本山。山号を「長等山（ながらさん）」と称する。開基（創立者）は大友与多王、本尊は弥勒菩薩である。日本三不動の一である黄不動で著名な寺院で、観音堂は西国三十三所観音霊場の第14番札所である。また、近江八景の1つである「三井の晩鐘」でも知られる。

なお一般には「三井寺（みいでら）」として知られるため、本文では「三井寺」の呼称を用いる。

三井寺は7世紀に大友氏（古代）の氏寺として草創され、9世紀に唐から帰国した留学僧円珍（天台寺門宗宗祖）によって再興された。三井寺は平安時代以降、皇室、貴族、武家などの幅広い信仰を集めて栄えたが、10世紀頃から比叡山延暦寺との対立抗争が激化し、比叡山の宗徒によって三井寺が焼き討ちされることが史上度々あった。近世には豊臣秀吉によって寺領を没収されて廃寺同然となったこともあるが、こうした歴史上の苦難を乗り越えてその都度再興されてきたことから、三井寺は「不死鳥の寺」と称されている。

三井寺の起源については、次のように伝承されている。大津京を造営した天智天皇は、念持仏の弥勒菩薩像を本尊とする寺を建立しようとしていたが、生前にはその志を果たせなかった。天皇の子の大友皇子（弘文天皇）も壬申の乱のため、25歳の若さで没している。大友皇子の子である大友与多王は、父の菩提のため、天智天皇所持の弥勒像を本尊とする寺の建立を発願した。壬申の乱で大友皇子と敵対していた天武天皇は、朱鳥元年（686年）この寺の建立を許可し、「園城寺」の寺号を与えた。「園城」という寺号は、大友与多王が自分の「荘園城邑」（「田畑屋敷」）を投げ打って一寺を建立しようとする志に感じて名付けたものという。なお、「三井寺」の通称は、この寺に涌く霊泉が天智・天武・持統の3代の天皇の産湯として使われたことから「御井」（みい）の寺と言われていたものが転じて三井寺となったという。

現在の三井寺には創建時に遡る遺物はほとんど残っていない。しかし、金堂付近からは、奈良時代前期に遡る古瓦が出土しており、大友氏と寺との関係も史料から裏付けられることから、以上の草創伝承は単なる伝説ではなく、ある程度史実を反映したものと見ることができる。

三井寺では、他宗で「管長」「別当」などと呼ばれる、一山を代表する僧のことを「長吏」（ちょうり）と呼んでいる。貞観元年（859年）、三井寺初代長吏に就任し、その後の三井寺の発展の基礎を築いたのが、智証大師円珍である。円珍は、弘仁5年（814年）、讃岐国那珂郡（香川県善通寺市）に生まれた。俗名は和気広雄、母方の姓は佐伯氏で、円珍の母は弘法大師空海の妹（もしくは姪）にあたる。幼時から学才を発揮し神童と呼ばれた広雄は、15歳で比叡山に登り、初代天台座主義真に入門。19歳の時に国家公認の正規の僧となり、円珍と改名した。その後、比叡山の規定に従って「十二年籠山行」（12年間、比叡山から下りずにひたすら修行する）を終えた後、大峯山や熊野三山を巡って厳しい修行をする。このことから三井寺は修験道とも深い繋がりを持っている。仁寿3年（853年）には唐へ留学して6年間、各地で修行。青龍寺の法全（はっせん）から密教の奥義を伝授された。天安2年（858年）、円珍は多くの経巻、図像、法具を携えて日本へ帰国した。翌貞観元年（859年）、大友氏の氏寺であった三井寺に「唐院」（とういん）を設置。寺を整備して修行の道場とすると共に、唐から請来した経典や法具を唐院に収蔵した。

貞観 8 年（866 年）、太政官から円珍に伝法の公験（くげん、証明書）が与えられた。顕教、密教に加えて修験道を兼学する円珍の伝法は、これによって政府の公認を得たわけであり、天台寺門宗ではこの時をもって開宗と見なしている。貞観 10 年（868 年）、円珍は天台宗最高の地位である天台座主に就任。以後、没するまでの 24 年間、その地位にあった。

円珍の没後、比叡山は円珍の門流と、慈覚大師円仁の門流との 2 派に分かれ、両者は事あるごとに対立するようになった。円珍の没後 1 世紀あまりを経た正暦 4 年（993 年）には、円仁派の僧たちが比叡山内にあった円珍派の房舎を打ち壊す騒動があり、両派の対立は決定的となり、円珍派は比叡山を下りて、三井寺に移った。比叡山延暦寺を「山門」と別称するのに対し三井寺を「寺門」と称することから、両者の対立抗争を「山門寺門の抗争」などと呼んでいる。比叡山宗徒による三井寺の焼き討ちは永保元年（1081 年）を始め、中世末期までに大規模なものだけで 10 回、小規模なものまで含めると 50 回にも上るという。

三井寺は、平安時代には朝廷や貴族の尊崇を集め、中でも藤原道長、白河上皇らが深く帰依したことが知られている。これら勢力者からの寄進等による荘園多数を支配下におき、信州善光寺も荘園末寺として記録に著れる。中世以降は源氏など武家の信仰も集めた。源氏は、源頼義が三井寺に戦勝祈願をしたことから歴代の尊崇が篤く、源頼政が平家打倒の兵を挙げた時にはこれに協力し、平家を滅ぼした源頼朝も当寺に保護を加えている。頼朝の意思を継いだ北条政子もこの方針を継承し、建保元年（1214 年）に延暦寺に焼き払われた園城寺を大内惟義・佐々木広綱・宇都宮蓮生ら在京の御家人に命じて直ちに再建させている。しかし、園城寺で僧侶として育てられていた源頼家の子公暁が叔父である源実朝を暗殺するという事件を起こしたために、以後鎌倉幕府より一時冷遇を受ける。だが、北条時頼の信頼が厚かった隆弁が別当に就任すると再興され、続く南北朝の内乱でも北朝・足利氏を支持したことから、室町幕府の保護を受けた。両幕府のこの厚遇は、強力な権門である延暦寺の勢力を牽制するために園城寺に対して一定の支援をすることが必要であると考えられていたからだと言われている。

文禄 4 年（1595 年）、三井寺は豊臣秀吉の怒りに触れ、欠所（寺領の没収、事実上の廃寺）を命じられている。三井寺が何によって秀吉の怒りを買ったものかは諸説あって定かではない。この結果、三井寺の本尊や宝物は他所へ移され、金堂をはじめとする堂宇も強制的に移築された。当時の三井寺金堂は比叡山に移され、延暦寺転法輪堂（釈迦堂）として現存している。慶長 3 年（1598 年）、秀吉は自らの死の直前になって三井寺の再興を許可している。これは死期を悟った秀吉が、霊験あらたかな三井寺の祟りを恐れたためとも言われている。秀吉の再興許可を受け、当時の三井寺長吏・道澄が中心となって寺の再興が進められた。現在の三井寺の寺観は、ほぼこの頃に整えられたものである。

明治維新後は天台宗寺門派を名乗っていたが、1946 年以降は天台寺門宗総本山となっている。

仁王門（区指定有形文化財）

八脚門、切妻造で丹塗（にぬり）。元禄期造営の本堂、薬師堂や太師堂などからなる徳川将軍の祈願寺としての伽藍の中で、重要な表門である。建立の年代については、元禄１０年（１６９７年）造営の観音堂（現本堂）などよりやや時代が下がると考えられる。

正面（南側）の両脇に金剛力士像（右側阿形像・左側吽形像）、背面（北側）の両脇には、二天像（右側増長天・左側広目天）の仏法を守る仏像が安置されている。

唐銅蓮葉形手洗水盤

護国寺の縁起伝承と明治末期から昭和初期の鋳金家・金工史家香取秀真氏の調査記録に、元禄１０年（１６９７年）ごろに鋳造され、江戸鋳物師椎名伊豫良寛の制作と記載されている。この手水舎は、江戸時代後期に刊行された「江戸名所図会」にも描かれており、江戸元禄期から明治大正期には境内の湧水を利用する大変珍しい自噴式手洗水盤だった。平成２０年に改修復元。

本堂（観音堂）－重要文化財－

護国寺の本堂は元禄１０年（1697）に建てられた建物で，桁行７間、梁間７間、１重、入母屋造、瓦棒銅板葺。綱吉公の生母である桂昌院の願いによるもので（桂昌院は大変熱心な仏教信者であった）、自身の信仰する念持仏の奉納・祈願を目的として建立。如意輪観世音菩薩を本尊として奉っている。元の本堂は、大正の大火で焼失したため、同時期に建てられた観音堂を移築して本堂とした。大きな流れ向拝を付した大建造物で、元禄文化の様相を伝える貴重な建物で、昭和６年（1931）に国の重要文化財に指定された。

月光殿（重要文化財）

書院造の建物は大津市の三井寺塔頭の日光院客殿でした。桃山時代の建立で、織田信長の時代に大修理を施している。昭和３年（1928）、品川御殿山を経て護国寺に移築された。桁行７間、梁間６間、１重、入母屋造、
妻入、正面軒唐破風付、桟瓦葺です。昭和６年（1931）に国の重要文化財に指定されています。

薬師堂（区指定建造物）

元禄４年（１６９１年）の建立になる一切経堂を現在の位置に移築し、薬師堂として使用することになったもの。大きな特徴は、柱間に「花頭窓（かとうまど）」を据えていることなど「禅宗様建築」の手法を取り入れていることである。小規模であるが、創建以後大きな改変もなく元禄期の標準的な遺構として、価値ある建造物である。

墓所

＜山田顕義＞

山田 顕義（やまだ あきよし、天保 15 年 10 月 9 日（1844 年 11 月 18 日） － 明治 25 年（1892 年）11 月 11 日）は、日本の江戸時代末期（幕末）の武士（長州藩士）、明治時代の政治家、陸軍軍人。通称は市之允、諱は顕孝、のち顕義と改めた。階級は陸軍中将。栄典は正二位勲一等伯爵。初代司法大臣。
日本の「小ナポレオン」といわれ、明治維新期の軍人として新政府に貢献するとともに、新日本の設立者として、近代日本の法典整備に力を尽くした。
また、山田自らが所長を務めた皇典講究所においては、日本法律学校（後の日本大学）、國學院（後の國學院大學）を創設しており、とりわけ日本大学は彼を学祖としている。

＜三条実美＞

三条 実美（さんじょう さねとみ、旧字：三條實美、天保 8 年 2 月 7 日（1837 年 3 月 13 日） － 明治 24 年（1891 年）2 月 18 日）は、日本の公卿、政治家。位階勲等爵位は、正一位大勲位公爵。号は梨堂（りどう）。変名は梨木 誠斉。右大臣、太政大臣、内大臣、内閣総理大臣兼任、貴族院議員などを歴任した明治政府の最高首脳人物の一人。元勲。

天保 8 年（1837 年）、内大臣・三条実万（さねつむ）の三男として生まれる。幼名は福麿。安政元年（1854 年）、次兄の三条公睦（きんむつ）の早世により家を継いだ。安政の大獄で処分された父・実万（さねつむ）と同じく尊皇攘夷（尊攘）派の公家として、文久 2 年（1862 年）に勅使の 1 人として江戸へ赴き、14 代将軍の徳川家茂に攘夷を督促し、この年、国事御用掛となった。長州藩と密接な関係を持ち、姉小路公知と共に尊皇攘夷激派の公卿として幕府に攘夷決行を求め、孝明天皇の大和行幸を企画した。

文久 3 年（1863 年）には、中川宮ら公武合体派の皇族・公卿と薩摩藩・会津藩らが連動したクーデター・八月十八日の政変により朝廷を追われ、京都を逃れて長州へ移る（七卿落ち）。長州藩に匿われるが、元治元年（1864 年）の第一次長州征伐（幕長戦争）に際しては、福岡藩へ預けられる。太宰府へと移送され、3 年間の幽閉生活を送った。また、その途中に宗像の唐津街道赤間宿に 1 ヵ月間宿泊した。この間に、薩摩藩の西郷隆盛や長州藩の高杉晋作らが太宰府の延寿王院に集まり、時勢を語り合った。この延寿王院には坂本龍馬も訪ねてきている。

慶応 3 年（1867 年）の王政復古で表舞台に復帰、成立した新政府で議定となる。翌慶応 4 年（1868 年）には副総裁。戊辰戦争においては、関東観察使として江戸へ赴く。明治 2 年（1869 年）には右大臣、同 4 年（1871 年）には太政大臣となった。明治 6 年（1873 年）の征韓論をめぐる政府内での対立では、西郷らの征韓派と岩倉具視や大久保利通らの征韓反対派の板挟みになり、岩倉を代理とする。明治 15 年（1882 年）、大勲位菊花大綬章を受章する。明治 18 年（1885 年）には太政官制が廃止されて、内閣制度が発足したため、内大臣に転じた。明治 24 年（1891 年）、55 歳で死去。死の直前に正一位を授与。 国葬をもって送られた。大正時代になって、京都御所に隣接した三条邸跡の梨木神社に合祀された。墓所は東京都文京区大塚の護国寺にある。

鐘楼（付梵鐘）－区指定建造物－

鐘楼の中では、伝統を重んじた格式の高い「袴腰付重層入母屋造（はかまごしつきじゅうそういりもやづくり）」の形式で、江戸時代中期の造営である。都内同期の遺構がほとんど失われている中で、当時の様式をつたえる貴重な文化遺産である。また、この鐘楼の梵鐘は、天和２年（１６８２年）に寄進されたものである。銘文は、五代将軍綱吉の生母桂昌院による観音堂建立の事情が述べられ、護国寺が将軍家の祈願寺として、幕府の厚い庇護を得ていたことを示す貴重な歴史資料である。

太師堂（区指定建造物）

堂は、元禄１４年（１７０１年）に再営された旧薬師堂を、大正１５年（１９２６年）以降に大修理し、太師堂として現在地に移築したものである。外観は、装飾が少なく素朴で荘重な印象を作り出し、中世的な特徴を残している。真言宗寺院における太師堂（開祖弘法大師を祀る）の格式の高さと、伝統を重んじる姿勢を受け継ぐものとして貴重な建造物である。

惣門（区指定有形文化財）

この惣門は、護国寺の方丈への軸線上にあり、寺院の門と住宅の門という性格を併せ持っている。形式は、社寺系のものではなく、江戸時代武家屋敷門の五万石以上の大名クラスの格式に相当する形式と偉容を持っている。当寺が、幕府の厚い庇護のもとで高い格式を保持した歴史を反映している。大名屋敷表門で現存するものは、いずれも江戸時代後期のものであるのに対して、この門は中期元禄年間のもので、特に貴重な文化財である。

雑　司　ヶ　谷　界　隈

＜雑司ヶ谷の由来＞

延享３年（１７４６年）、町方支配となり雑司ヶ谷の町名がつけられた。町名の由来についてはいろいろな説がある。

昔、小日向（こひなた）の金剛寺（また、法明寺とも）の支配地で、物や税を納める雑司料であったと説。また、建武のころ（１３３４年～３６年）南朝の雑士（雑事をつかさどる）柳下若狭（やぎしたわかさ）・長島内匠（うちみ）などがここに住んだので、雑司ヶ谷と唱えたという。（「新編武蔵風土記」）

その後、「蔵主ヶ谷」、「僧司ヶ谷」、「曹子ヶ谷」などと書かれたが、八代将軍吉宗が鷹狩のとき、「雑司ヶ谷村」と書くべしとの命があり、今の文字を用いたという。

清土鬼子母神（吉祥天）

日蓮宗寺院の清土鬼子母神堂は、文京区目白台にある仏堂です。清土鬼子母神堂は、南池袋法明寺の鬼子母神堂に祀られている鬼子母神像が、山村丹右衛門によって掘り出された（出現）した旧跡だといいます。清土は当地の旧地名（雑司ヶ谷村小名清土）で、清土鬼子母神と称されています。

鬼子母神社

小名清土にあり、前に云鬼子母神出現の古跡なり、古は陸田なりしか今は雑木繁茂せし小丘なり、大行院持。七本杉。一株にて七本に分れしか、今は三本存す各一抱斗。三角井。鬼子母神出現の跡と云。

（新編武蔵風土　記稿より）

室町時代の永禄４年（西暦 1561 年）１月 16 日、雑司の役にあった柳下若挟守の家臣、山村丹右衛門が清土（文京区目白台）の地の辺りより掘りだし、星の井（清土鬼子母神〈別称、お穴鬼子母神〉境内にある三角井戸）あたりでお像を清め、東陽坊（後、大行院と改称、その後法明寺に合併）という寺に納めたものです。

東陽坊の一僧侶が、その霊験顕著なことを知って、ひそかにご尊像を自身の故郷に持ち帰ったところ、意に反してたちまち病気になったので、その地の人々が大いに畏れ、再び東陽坊に戻したとされています。

菊池寛　旧宅跡

菊池寛は、明治２１年（１８８８年）１２月２６日に高松市に生まれました。戯曲「父帰る」、小説「忠直卿行状記」などの作品で文壇の地位を確立しました。その後、大正１２年（１９２３年）に雑誌「文藝春秋」を創刊、昭和１０年（１９３５年）芥川賞・直木賞を創設するなど、後進の育成にも尽力し、文壇の大御所と言われました。寛は大正１２年以来、雑司ヶ谷金山に居住していましたが、昭和１２年に雑司ヶ谷１丁目に転居、晩年までここで過ごしました。昭和２３年３月６日没。

旧マッケーレブ邸（雑司ヶ谷旧宣教師館）

雑司が谷旧宣教師館は、明治 40 年にアメリカ人宣教師のマッケーレブが自らの居宅として建てたものです。マッケーレブは、昭和 16 年（1941）に帰国するまでの 34 年間この家で生活をしていました。豊島区内に現存する最古の近代木造洋風建築であり、東京都内でも数少ない明治期の宣教師館として大変貴重なものです。

また、当時の新興住宅地における布教活動と幼児教育の拠点としての意味を持っていたことを地域の人が記憶しており、昭和 62 年 9 月 1 日に、豊島区の登録有形文化財として登録し、その後、特に重要な文化財として保存、活用をさらに進めるため、平成 4 年 11 月 10 日に、指定文化財としました。その後、平成 11 年 3 月 3 日、東京都指定有形文化財（「旧マッケーレブ邸」）になりました。

この建物は、木造総 2 階建て住宅で、全体のデザインはシングル様式であり、細部のデザインにはカーペンターゴシック様式を用いており、19 世紀後半のアメリカ郊外住宅の特色を写した質素な外国人住宅です。

豊島区では、昭和 57 年に取得して以来、建物調査、保存修理工事などを経たのち、平成元年 1 月から館内に関連資料等を展示し一般公開を行なっています。

雑司ヶ谷霊園

徳川三代将軍家光の寛永１５年（１６３８年）に薬草栽培の「薬園」となり、八代将軍吉宗の享保４年（１７１９年）には「御鷹部屋」に変わり、将軍の鷹狩りに使う鷹の飼育場所として使われていた。明治７年（１８７４年）９月１日に東京府によって共同埋葬墓地となった。広さは約１０万㎡。夏目漱石・泉鏡花・ジョン万次郎・竹久夢二・小泉八雲・金田一京助・永井荷風ほか有名人の墓がたくさんある。

清立院（毘沙門天）

約７７０年前、真言宗・清瀧寺として建立。のちに村を疫病から救った雲水が日蓮上人像を寺に残したことから、日蓮宗・清立院と改めてものです。雨乞いと皮膚病の祈願寺として尊崇されています。

大鳥神社（恵比寿神）

正徳年間鬼子母神境内に鷲明神として創祀。明治維新、神仏分離の令に依り、大門欅並木の料亭蝶屋地内に大鳥神社と改称し仮遷座しましたが、これを憂い旧幕臣矢嶋昌郁氏が自己の宅地を社殿として奉献。その後境内地を漸次拡張し現状となりました。大鳥神社が江戸時代に法明寺鬼子母神堂境内にあった頃、「えびす様」が合祀されていましたが、明治の神仏分離によって現在の地に遷座された以降その行方は分からなくなっていました。平成２２年に雑司が谷の地に七福神が創設され、それに伴い同年の９月２９日に元々大鳥神社と一緒に祀られていた「えびす様」を、兵庫県のえびす宮総本社である摂津西宮神社よりその御分霊を戴き、この大鳥神社の境内社として鎮座させたものです。

雑司ヶ谷鬼子母神（大黒天）

鬼子母神は広く子授け、安産、子育ての鬼神として知られています。しかし、鬼子母神は当初、他人の子を取って食べる邪悪なものであったのを、仏によって教化され、仏の守護神になったとされています。普通「鬼子母神」と書きますが雑司が谷鬼子母神は「角（つの）」がないと伝えられ、正式には鬼の字にツノがありません。この雑司が谷鬼子母神堂（本堂）が創建されたのは縁起（えんぎ）では 1666（寛文 6）年とされていますが、1976 年から 1979 年にかけて行われた修理工事の結果、1664（寛文 4）年の創建であることが判明しました。同様に、拝殿と幣殿（相の間）は元禄 13 年（1700 年）に建立されたことが判明しました。1561（永禄 4）年、現在の文京区目白台付近の「清戸（せいど）」の畑より、鬼子母神が出土し、大行院（現在の法明寺内の一寺院であった）領の武芳（たけよし）稲荷の深森を切り開いて像を安置し、鎮守（ちんじゅ）としたのがはじまりで、1666 年に安芸の太守・広島藩主浅野光晟（みつあきら）の室「自昌院」が宝殿を造立しました。

鬼子母神堂（本殿・相の間・拝殿）は東京都の指定有形文化財となっています。本殿は、一重・流造・檜皮葺形銅板葺。また、境内の大イチョウ、参道のケヤキ並木も都の指定天然記念物となっています。雑司が谷鬼子母神は宝殿が建立された江戸初期から多くの参詣人を集めました。門前には茶屋や料亭が建ち並び繁昌しました。その時期は享保期（1716 年～36 年）より文化・文政（1804 年～30 年）ころといわれています。江戸町人が経済力を増し、商業が活発化した時期といってよいでしょう。したがって信心といっても物見遊山を兼ねた参詣が多かったと思われます。それが一層門前の料亭などを栄えさせることになりました。1710 年（宝永 7 年）門前は寺社奉行に願い出て許され、区内最初の町屋になりました。

法明寺

法明寺（ほうみょうじ）は、東京都豊島区南池袋にある、日蓮宗の寺院。山号は威光山。飛地境内に鬼子母神堂があります。往時は、真言宗とも天台宗ともいわれ、吾妻鏡に見える威光寺に比定されていました。しかし、妙楽寺の日光菩薩像の胎内から墨書銘が発見されたことにより、威光寺ではないことが判明。鎌倉時代、日蓮の弟子・日源により、日蓮宗に改宗し、威光山法明寺と改称。室町時代、鬼子母神が安置されて茶屋などが軒を連ね門前町を形成しました。鬼子母神堂（きしもじんどう/きしもしんどう）は法明寺の飛地境内にある堂で、本尊が「鬼子母神」です。

＜法明寺のホームページより抜粋＞

当山におまつりする鬼子母神（きしもじん）のご尊像は室町時代の永禄 4 年（西暦 1561 年）1 月 16 日、雑司の役にあった柳下若挟守の家臣、山村丹右衛門が清土（文京区目白台）の地の辺りより掘りだし、星の井（清土鬼子母神〈別称、お穴鬼子母神〉境内にある三角井戸）あたりでお像を清め、東陽坊（後、大行院と改称、その後法明寺に合併）という寺に納めたものです。

東陽坊の一僧侶が、その霊験顕著なことを知って、ひそかにご尊像を自身の故郷に持ち帰ったところ、意に反してたちまち病気になったので、その地の人々が大いに畏れ、再び東陽坊に戻したとされています。その後、信仰はますます盛んとなり、安土桃山時代の天正 6 年（1578 年）『稲荷の森』と呼ばれていた当地に、村の人々が堂宇を建て今日に至っています。

現在のお堂は、本殿が寛文 4 年（1664 年）徳川 4 代将軍家綱の代に加賀藩主前田利常公の息女で、安芸藩主浅野家に嫁した自昌院殿英心日妙大姉の寄進により建立され、その後現在の規模に拡張されています。

昭和 35 年に東京都有形文化財の指定を受け、昭和 51 年から 54 年にかけ、江戸時代の姿に復する解体復元の大修理が行われました。

鬼子母神は安産・子育（こやす）の神様として広く信仰の対象となっていますが、もともとの来歴には深いいわれがあります。その昔、鬼子母神はインドで訶梨帝母（カリテイモ）とよばれ、王舎城（オウシャジョウ）の夜叉神の娘で、嫁して多くの子供を産みました。

しかしその性質は暴虐この上なく、近隣の幼児をとって食べるので、人々から恐れ憎まれました。お釈迦様は、その過ちから帝母を救うことを考えられ、その末の子を隠してしまいました。その時の帝母の嘆き悲しむ様は限りなく、お釈迦様は、「千人のうちの一子を失うもかくの如し。いわんや人の一子を食らうとき、その父母の嘆きやいかん」と戒めました。

そこで帝母ははじめて今までの過ちを悟り、お釈迦様に帰依し、その後安産・子育の神となることを誓い、人々に尊崇されるようになったとされています。

当山の鬼子母神像は、鬼形ではなく、羽衣・瓔洛をつけ、吉祥果を持ち幼児を抱いた菩薩形の美しいお姿をしているので、とくに角（つの）のつかない鬼の字を用い「雑司ヶ谷鬼子母神」と尊称しております。日蓮聖人は御書のなかで「十羅刹女と申すは 10 人の大鬼神女、四天下の一切の鬼神の母なり。また十羅刹女の母なり、鬼子母神これなり」と述べられ鬼子母神を重視されています。

もともと鬼子母神信仰は平安朝の昔から一般的な信仰としてありましたが、法華信仰に生きる者、日蓮宗に属する者にとって、鬼子母神はただ単に子供を守る神であるばかりでなく、信者・宗徒の外護神として崇められています。

観静院（弁財天）

日蓮宗寺院の観静院は、平等山と号します。観静院は、元禄初期に法明寺塔頭として創立、江戸時代には池袋御嶽神社の別当寺を勤めていました。雑司が谷七福神の弁財天です。

元禄初期の創立、梅林の中に天神堂があり、加藤清正が文禄～慶長の役の時御神体を守護神としたという。その後、法明寺塔頭として創立され天神堂を吸収して今日に至る。また代々の住職は池袋御嶽神社の別当を努めていたが、神社は明治の神仏分離により、また戦中の国体法に基き神社本庁に組み入れられる。昭和 20 年戦災を被る。（「豊島の寺院」より）

中野ビル（布袋尊）

有限会社中野ビル布袋尊像は、大正6年(1917)7代当主中野岩雄の弟により親子像として建立された後、中野岩雄による株式会社中野石材商店の店頭に祀られて以来 92 年間池袋の歴史を見守り続けています。親の布袋尊像の右肩は東京大空襲（昭和20年〔1945〕3月10日） 城北大空襲（昭和20年〔1945〕4月13日）の2度の空襲により破損戦禍の生き証人でもあります。昭和62年（1987）第六・七中野ビルが落成した際に、当ビル前に布袋尊像を安置。平成22年（2010）1月、雑司が谷七福神の設置趣意に賛同し、社造営に着手同平成22年（2010）10月竣工。

仙行寺（華の福禄寿）

仙行寺は、明治41年(1908)に小石川指ケ谷町の善行院と仙応院が合併して仙行寺となって後、当地へ移転しました。

創立年月不詳、明治41年（1908）6月東京府の許可を受け、小石川指ヶ谷町38善行院に隣接の仙応院を合併し、仙行寺と改称する。明治45年（1912）道路改修のため池袋蟹窪に移転。昭和20年戦災で焼失。昭和25年区画整理により墓地移転のため現在地に再移転。（豊島の寺院より）

古代オリエント博物館

古代オリエント博物館は、我が国最初の古代オリエントをテーマとする博物館として1978年に誕生。以来、シリアでの発掘調査を行い、その出土品に加えて考古、美術、歴史等の幅広い資料を展示しています。西アジア、エジプト地域の旧石器時代からササン朝時代までの資料約 4,500 点及びシリア出土品を多数収蔵しています。

巣鴨プリズン跡地

―記念碑の裏面には次の言葉が刻まれています―

「第二次世界大戦後、東京市谷において極東国際軍事裁判所が課した刑及び他の連合国戦争犯罪法廷が課した一部の刑が、この地で執行された。

戦争による悲劇を再びくりかえさないため、この地を前述の遺跡とし、この碑を建立する。

昭和五十五年六月」

参考資料

＜巣鴨拘置所＞　　出典：ウィキペディア フリー百科事典

巣鴨プリズン（すがもプリズン、Sugamo Prison）は、第二次世界大戦後に設置された戦争犯罪人(戦犯)の収容施設である。東京都豊島区西巣鴨（現豊島区東池袋）の東京拘置所施設を接収し、使用した。「巣鴨拘置所」などと呼ばれたこともある。

極東国際軍事裁判により死刑判決を受けた東條英機ら7名の死刑が執行（1948年12月23日）されたことでも知られる。

＜前史＞

かつてこの地には巣鴨監獄・巣鴨刑務所（1922年改称）があった。関東大震災（1923年）で被害を受けた巣鴨刑務所は東京府府中に移転することになり、1935年に移転。その跡地に庁舎が新築され、1937年、未決囚を主に収容する市谷刑務所が移転し、普通刑務所と区別するため「東京拘置所」と改称された。なお、敷地は巣鴨刑務所時代の約3分の1に縮小された。

第二次世界大戦中の1944年には、ゾルゲ事件の主犯とされるリヒャルト・ゾルゲおよび尾崎秀実の死刑が執行された。彼らのほか、当時の同拘置所には主として共産主義者等のいわゆる思想犯や、反戦運動に関わった宗教家等が拘置されていた。

＜米軍管轄下のスガモプリズン＞

第二次大戦後にはGHQによって接収されて、スガモプリズンと呼ばれ、戦犯容疑者が多数収容された。米軍は情報戦の一つとして、監房に盗聴装置を設置し、戦犯たちの会話を盗聴していた事が後年明かされている。

1947年2月、既決囚の労働が本格化し、A級戦犯・60歳以上の高齢者・病人以外は全て就労を命じられた。プリズン周辺の道路整備や運動場、農園、兵舎・将校用宿舎建設等の重労働を命じられ、午前と午後に1回ずつある5分の休憩と昼食時の休憩時にしか休めない。私物は一切禁止で、全て制服着用で行わなければならない。長い拘禁生活と裁判の疲労で体力の落ちた戦犯たちには重労働で「こんなことならいっそ死んでしまえばよかった」との声もあった。この重労働が2年続き、完成に至ると、戦犯たちは信頼を勝ち取り、減刑などの恩恵を受けた。新聞、雑誌、本などの閲覧、上野図書館からの借り出しも許可された。

ラジオも定期聴取でき、映画も週に一回鑑賞出来た。

1948年12月には、極東国際軍事裁判により死刑判決を受けた東條英機ら7名のA級戦犯の死刑も執行された。

1949年から始まった朝鮮戦争で米兵が出兵するため、1950年8月、日本人刑務官が着任した（米軍の監理下で警備にあたった）。なお、最も収容者数が多かったのは1950年1月時点で、1862人の戦犯が収容されていた。

＜日本移管後＞

1952年4月、平和条約の発効により日本に移管され、引き続き戦犯を収容していた。以後、正式には「巣鴨刑務所」となったが、一般に「巣鴨プリズン」と呼ばれた。

1958年5月、最後の戦犯18名が釈放され、巣鴨刑務所は閉鎖。東京拘置所が巣鴨に復元された。

＜現状＞

1971年に東京拘置所が移転した後、跡地はサンシャインシティとして再開発（サンシャインシティの開業は1978年4月6日）された。

処刑場周辺は豊島区立東池袋中央公園となり、1980年6月に慰霊碑「平和の碑」が建立されている。